

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21984

研究課題名（和文）公立小学校における外国ルーツの子どもの支援教室活動を学校全体と共有する取り組み

研究課題名（英文）A School-Wide Effort to Share Activities of the Mother Tongue Class At a Public Elementary School

研究代表者

近藤 美佳（KONDO, Mika）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・講師

研究者番号：20875091

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、公立小学校内に設置された外国ルーツの子どもの母語教室の活動を、在籍校の他の児童に向けて公開・共有する試みを実施することの意義・効果を検討した。本研究を通して、母語教室に集う子どもたちの間に存在する多様性を尊重することの重要性を再確認することができた。また、その多様性があるがままに母語教室の外に「開」くことによって、在籍校の教員や子どもたちが「外国人」対「日本人」という二項対立的な見方からの脱却に繋がる学びを得る可能性を見出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

公立学校に設置された母語教室の在り方を再検討したことが、本研究の社会的意義である。「〇〇にルーツを持つ子ども」を一括りにするのではなく、子どもたちの中にある多様性を尊重すること、また、「〇〇語の習得を目指す」のではなく、子どもたちが持つすべての言語能力や文化の知識を活かすことを目指した教室活動の一例を示した。そして、それを外国籍の児童・生徒だけのための「閉ざされた活動」から、他の児童・生徒や教員とともに取り組む「学校全体の活動」へと転換することによって、「多文化共生教育」の実現に繋がり得る可能性を示した。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to carry out open days at a mother tongue class for children with foreign roots at a public elementary school and examines the significance and effects of it.

This study shows the importance of not considering children who are members of a homogeneous group to be "children with roots in XX" but respecting the diversity among them. Such a shared attitude throughout the school will enable all teachers and students to break away from the dichotomy between "foreigners" and "Japanese."

研究分野：母語保持・バイリンガル教育

キーワード：母語 継承語 外国にルーツをもつ子ども 在日ベトナム人 多文化共生

## 1. 研究開始当初の背景

在日外国人数の増加に伴い、日本の公立学校に通う外国籍の子どもの数が増加している（文部科学省「学校基本調査」によれば、公立学校に在籍している外国人児童生徒数は平成30年5月1日現在で93,133人）。昨今では、そのような子どもたちの母語・母文化の重要性の認識も広まりつつあり、外国ルーツの子どもたちを支援するために設置された教室（学校により日本語教室、国際教室またはその他独自の名称で呼ばれる。この研究計画書の中ではこのような教室を総称して「日本語教室」と呼ぶ）の中で、母語・母文化を扱う活動が行われることも増えてきた（国の方針としても、文部科学省「外国人児童生徒受入れの手引き」の中で、子どもの母語・母文化について「尊重し、習得を援助することが望まれ」ることが言及された（2011年初版 p.9、2019年改訂版 p.11））。しかし、このような公立学校内の活動は依然として当事者のみの問題として扱われることが多く、同じ学校教員でさえ「日本語教室のことはよくわからない」というような状況も少なくない。申請者は、これまで公立小学校におけるベトナムルーツの子どもたちへの母語・母文化の指導に携わってきた中で、このような「認知されていない」状況が、子どもたちの母語・母文化学習のモチベーションの低下・喪失に繋がる例を多く見てきた。このような状況を打破すべく、「日本語教室」の活動を外国籍の児童・生徒だけのための「閉ざされた活動」から、他の児童・生徒や教員とともに取り組む「学校全体の活動」へ転換することを試みたい。こうして「日本語教室」に全校児童を巻き込むことにより、

- 1) 外国ルーツの子どもたちの母語・母文化に対する興味関心や誇りを高める
  - 2) 在籍校の他の子どもたちの他言語・他文化への興味関心や尊重の気持ちを高める
  - 3) 学校・地域全体の「多文化共生」の意識を高める
- ことが可能になるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究において、まず①外国にルーツをもつ子どものための学びを充実させ、それからそれを②在籍校の他の子どもたちに共有する取り組みを実施する。これにより、外国にルーツをもつ子どもたちは母語・母文化の学習へのモチベーションを高めることができ、在籍校の他の子どもたちは異文化理解・多文化共生の学びを得られる状況を作り出す。そして、この双方向の効果が子どもたちから周りの大人へと広まることにより、③学校・地域全体での多文化共生の学びに繋がることを目指す。この取り組み事例とその効果を記述することによって、公立学校内に外国にルーツをもつ子どもたちが母語・母文化を学ぶ場所を設けることが学校全体の「多文化共生教育」の実現に繋がり得る例を示す。そして、公立学校内に外国にルーツをもつ子どもたちが母語・母文化を学ぶ場所を設置することの教育効果を検証する。

## 3. 研究の方法

本研究では、神戸市立 S 小学校（仮称）におけるベトナムルーツの子どもたちのための教室（以下 H 教室）をフィールドとし、H 教室を一般の児童に公開する活動を実施する。その活動を通して、H 教室の子どもたち、在籍校の他の子どもたち、そして子どもたちを取り巻く大人たちの意識や態度がどのように変化するかを明らかにし、その効果を検証する。

### 1) H 教室における学習内容の充実

H 教室の子どもたちが、より楽しく、より効果を実感しやすい形でベトナム語やベトナム文化を学ぶことができるよう学習内容を工夫・改善する。

### 2) H 教室活動公開の実施

H 教室を一般の児童に公開する活動を実施し、学びを共有する。

### 3) H 教室活動公開・共有の効果の分析

公開活動の実施により、①H 教室の子どもたちのベトナム語・ベトナム文化に対する意識、H 教室に対する意識、またベトナム語能力やベトナム文化に対する知識にどのような変化があるか、②参加した在籍校の他の子どもたちの他言語・他文化に対する意識、H 教室に対する意識、H 教室に在籍する友人に対する意識にどのような変化があるか、③学校・地域に対してどのようなインパクトを与え得るかを、参与観察のデータやアンケート・インタビュー結果の分析によって明らかにする。

## 4. 研究成果

### 研究成果①：H 教室の学習活動の充実

同じ学校に通うベトナムルーツの子どもたちであっても、家庭環境等によりベトナム文化やベトナム語に触れる程度は大きく異なり、それは子どもたちのことばの力や学習に向かう姿勢の差となって表出する。こうした差は、従来母語教室の難しさであると捉えられてきたが、García 他 (2017) の「トランスランゲージング・クラスルーム (Translanguaging Classroom)」の実践を取り入れることによって、その差を活かす授業をすることが可能となった。

## 研究成果②：H教室の活動を一般の児童に対して「開く」取り組みの実施

2020年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から小学校内での活動に制限があり、H教室を「開く」取り組みを実施することが叶わなかった。2021年度には、H教室の活動としてベトナムを紹介する動画を撮影し、校内で放送するという形式を取った。2022年度には二度取り組みを実施することができた。以下、その概要を記す。

### 【1】2021年度 タブカムTV

- ①ベトナムのお正月 ②ベトナムで人気のゲーム「チェス」 ③獅子舞の紹介



(写真1)ベトナムと日本におけるお正月の過ごし方のちがいを紹介する子どもたち

(写真2)チェスの遊び方をベトナム語で紹介する子どもたち

(写真3)獅子舞に使う楽器について説明・実演する子どもたち

### 【2】2022年度 第一回目 タブカムDAY (2022年7月8日)

ボードゲーム「バウクアカーコップ」で遊ぼう！



(写真4)ボードゲーム「バウクアカーコップ」体験を楽しむ子どもたち



(写真5)ボードゲーム「バウクアカーコップ」のルールを説明するH教室生

### 【3】2022年度 第二回目 タブカムDAY (2023年2月24日)

[低学年クラス] 十二支かるた [高学年クラス] 獅子舞体験



(写真6)十二支かるたの練習をするH教室生



(写真7)獅子舞の動きについて説明するH教室生

こうした「開く」取り組みは、自分たちが中心に位置づく場であるH教室で日本人児童を「ゲスト」として迎える活動である。ここでは、H教室生が「ホスト」を務め、自らが見せたいと思う内容を主体的に選び、自らが見てほしいと願う相手を誘ったうえで披露することができる。こうした「ホスト・ゲスト関係の転換」が、H教室生をエンパワーしたことを確認することができた。

## まとめと今後の課題

本研究を通して、母語教室に集う子どもたちの間に存在する多様性を尊重することの重要性を再確認することができた。また、その多様性があるがままに母語教室の外に「開く」ことによって、在籍校の教員や子どもたちが「外国人」対「日本人」という二項対立的な見方からの脱却に繋がる学びを得る可能性を見出すことができた。

初年度に公開活動が制限されたことによる影響もあり、今回の研究期間においては「学校・地域に対してどのようなインパクトを与え得るか」までを十分に追うことが叶わなかったため、今後の課題としたい。

### 〈引用文献〉

García, O., Johnson, S. I., & Seltzer, K. (2017). The translanguaging classroom: Leveraging student bilingualism for learning. Caslon.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 近藤美佳	4. 巻 18
2. 論文標題 公立学校における母語教室活動を学校に「開く」取り組み 母語教室公開イベント「タブカムDAY」の実践報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究	6. 最初と最後の頁 81-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 近藤美佳
2. 発表標題 ベトナムにルーツを持つ子どもたちは何をどのように継承するのか
3. 学会等名 DDDLingフォーラム：継承語としてのベトナム語 / 第3回ベトナム語研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 近藤美佳
2. 発表標題 公立学校内に設置されたベトナム母語教室活動における トランス・ランゲージングの実践
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会 2022年度研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤美佳
2. 発表標題 公立学校における母語教室活動を学校に「開く」取り組み 母語教室公開イベント「タブカムDAY」の実践報告
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会 2021年度研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤美佳
2. 発表標題 現状と課題(1) ベトナムにルーツを持つ子どもたち
3. 学会等名 東南アジア学会関西例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤美佳
2. 発表標題 公立小学校における母語教室が目指すこと：ベトナムルーツの子どもたちへの学習支援活動を通して
3. 学会等名 東南アジア学会第103回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤美佳
2. 発表標題 在日ベトナム人年少者のための継承ベトナム語カリキュラム実践の試み
3. 学会等名 リンディフォーラム：日本におけるベトナム語研究の今 / 第1回ベトナム語研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>関連する社会貢献活動として、以下の活動を行った。</p> <p>大阪府教育庁 令和2年度教育サポーター育成研修における講演「外国にルーツを持つ子どもたちが母語・継承語とよりよく向き合うために」(2020年11月25日)</p> <p>吹田市国際交流協会 多文化ぶらす@オンラインにおける講演「ベトナムにルーツを持つ子どもたちが教えてくれた多文化共生」(2021年11月23日)</p> <p>MHB学会国内CLD児教育部会・東京外国語大学多言語多文化共生センター 多言語DLAワークショップにおける講義「言語別DLAワークショップ ベトナム語」(2022年2月12日)</p> <p>西尾市教育委員会 日本語教育等指導のための研修「ベトナム語DLAスキルアップ研修」(2023年3月20日)</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------